

ヒラメ採集および飼育によるヘイ死数について

西 田 輝 己

47年度の標識放流調査では極めて再捕率が低い結果となった。この低再捕の一因は、標識放流魚のケタ網曳網と揚網による活力低下が放流後のヘイ死をもたらしたものと考えられるのでこれらのヒラメに対する影響を調べた。

調 査 方 法

前記「ヒラメ飼育試験」と同方法で採取した魚体を2才魚は10t水槽に、当才魚は1t塩ビ水槽へ移し入れ十分な流水と送気をし斜光材でおおい魚体の安定をはかりヘイ死数の経過をみた。

実験期間はS48年5月2,2日より8月2日、投餌は2才魚では、「ヒラメ飼育実験」により、当才魚は採集後7日目よりアジの細片80~200gの範囲内で残餌のないようにおこない、魚体消毒は5月31日。6月25日採集魚にそれぞれ採集翌日に22、10ppmアイベツト30分水溶をおこなった。

結 果 と 考 察

表1のようにまず採集時に当才魚では14%の個体が既に死んでいる。これに比べて2才魚は全て生きていた。引き続き採集時の影響は輸送、池に持ち帰っての飼育中にも現われ、輸送中に当才魚では49%、2才魚では4~9%がヘイ死、飼育開始3日間に当才では9%、2才では0~14%が死んでいる。表2はヒラメの生残率をグラフにしたものだが大体3日目より平行線となっている。この事は採集時の影響は3日程で消えるものと思われる。又、このグラフの2才魚間の差は薬浴の有無と考えられる。

昨年度の標識放流では採集時のヘイ死魚体を除いた個体全てに標識ピンを打ち込み放流をしていた。これを、本年度の実験にあてはめて表1をみると当才魚では948尾採集の内816尾放流をしていた事になる。この816尾の内8日間生き残ったのは256尾31%、残り69%は放流後死んでしまう事になる。この事は昨年度の放流個体はピンを打ち込み薬浴をしていないので少なくとも69%は海中にてヘイ死したものと思われる。同様に2才魚でも6~28%がヘイ死している。

なお、飼育期間中の水温経過は「ヒラメ飼育試験」図3、4と同様である。

表1 ヒラメ採集、飼育によるヘイ死数

経過日数	5月22日採集 2才魚101尾			5月31日採集 2才魚77尾			6月25日採集 当才魚948尾			備考
	ヘイ死数	現存数	生残率	ヘイ死数	現存数	生残率	ヘイ死数	現存数	生残率	
採集時	0尾	10尾	100%	0	77	100	132	816	86	採集による死
1日	9	92	91	3	74	96	464	352	37	輸送による死
2	10	82	81	0	〃	〃	60	292	30	
3	2	80	79	0	〃	〃	21	271	28	
4	2	78	77	0	〃	〃	5	266	28	
5	2	76	75	0	〃	〃	4	262	27	
6	1	75	74	0	〃	〃	4	258	27	
7	0	〃	〃	0	〃	〃	2	256	27	
8	0	〃	〃	1	73	95	0	256	27	
11	0	〃	〃	1	72	94				
13	1	74	73							
21	1	73	72							
魚体体長 モード	23~26cm			24~27cm アイベット22ppmで水浴			11~13cm アイベット10ppmで水浴			

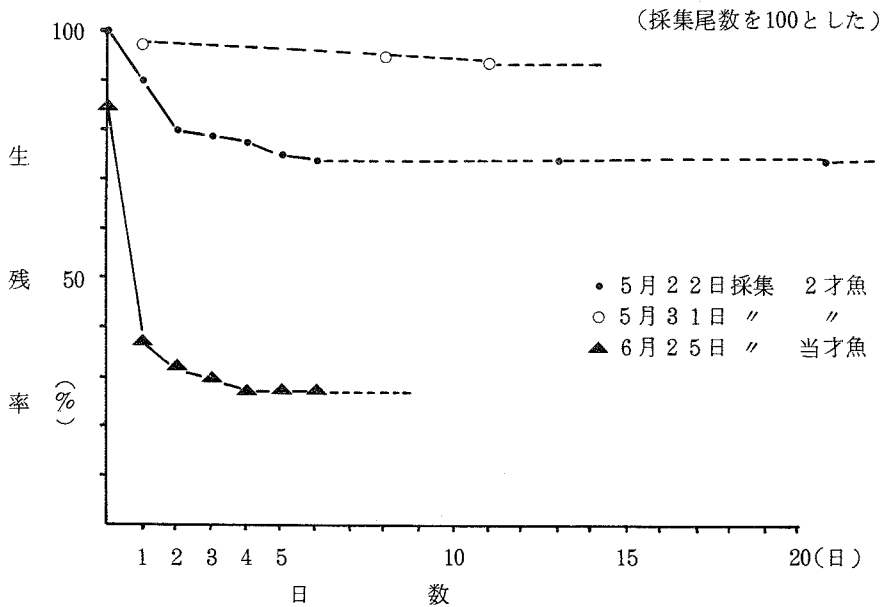


表2 ヒラメ飼養生残率